



三毛猫
次郎の短い一日



さて、わしらは目的を失ってしもうたんじゃ。母上は既にお亡くなりになっているということじゃし、「守り神」様にも会ってしもうた。暫くの間は与っさんの家のすぐ近くで、のんびりと過ごしておったんじゃ。

数ヵ月後。

あの白猫が、わしらの前に再び現れたんじゃ。そう、ペルシャじゃよ。わしと小次郎が与っさんの所で昼寝をしておったら、あのペルシャが来てわしらをトントン起こしてきおっての、わしは初め寝ぼけておったが、小次郎がペルシャと大きな声で言うたから完全に目が覚めたんじゃ。



目の前におった白猫、よく見るとペルシャなんじゃが、パツと見はペルシャに見えぬ。それもそのはずじゃ、薄汚れてしもうて白猫言うより、茶毛猫というところじゃった。随分と衰弱しておったわい。聞くとペルシャ、何とここまで昼夜八日間掛けて来たと言うたんじゃよ。

何も無いが遠慮するで無い、ともかく休め言うて寝かせてやったんじゃが、その後ペルシャは三日間続けて寝通しおったわい。わしと小次郎はペルシャのことを交代交代で見守っておったんじゃよ。

それにしても一体全体、御嬢様はどうしたんじゃろうと思っとった。

三日後、ペルシャが起きて事情を聞くことにしたんじゃ。

じゃがペルシャは御嬢様は別に今でも元気じゃ言うて、それ以上は話したくないと言うたんじゃ。

わしらはそれ以上聞き出すのは止めて、暫くの間、昔の話をしておった。その次にペ

ルシャがここまで来る道中で経験した武勇伝も聞いたんじゃ。

ペルシャはここまでの道程を「車」の窓から見ておったから、大体は覚えておったそうじゃ。じゃが多少迷ってしもうたから、三日は余計に掛かってしまったらしい。山道の途中では、野良犬どもに襲われたそうじゃが、それは木に登ってかわしたそうじゃ。他にもある。生まれて初めて生きた魚を捕えたこと、川を泳いだこと、見たことの無い細長い生き物に会ったこと、訳の分からない実を食うたこと、星が落ちるのを見たこと、沢山あったわい。

それを話すペルシャの目の輝きと言ったら何と言えば良いんじゃないだろうか、分からん。

最後にペルシャが八日間も掛けてここへ戻って来た理由を話したんじゃ。

それはもう一度、昔の御嬢様の家へ行ってみたいということじゃった。時間が余り無いと言う。随分と急いでいる様子じゃった。

後で思えば既にペルシャは、自分の死を悟っておったんじゃないかなあ。

ペルシャが起きたのが夕方近かったから、わしらは次の日に元御嬢様の家へ行くことにしたんじゃ。

その日の晩はペルシャも与っさんから魚を頂戴することにしたんじゃ。与っさんもペルシャと再会出来て、非常に喜んでおった様じゃ。



次の日の朝。

ペルシャは与っさんから貰った魚の骨を綺麗に並べ直してから出発したんじゃ。思えばペルシャと出会ったのはわしが捨てられた日じゃった。初めはペルシャに知らんぷりされてしもうたわい。それが今となっては親友じゃ。

わしらはついでに、ペルシャが御嬢様に捕まってしもうた行き止まりの道も行ってみることにしたんじゃ。それがの、なかなか辿り着けんのじゃが、実は既に辿り着いておったわい。そこは壁も壊されて広い「車」の止まり場になっておったんじゃよ。

この短期間の間にこんなにも変わってしまうとは、いや変えてしまうとは、人間の力は素直にすごいと思ったわ。

そして、わしらはペルシャが大脱走した時の様に訳の分からん希望に満ち溢れて、元御嬢様の家へ向かったんじゃ。

元御嬢様邸、到着。

今になっても家の中は空っぽになっておった。草木が大分伸びておったわい。ペルシャが家の門を飛び越えようとしたんじゃが、

一回目は失敗してしもうたんじゃ。ペルシャは飼い猫じゃから、こういうのが不得意みたいじゃのうと思っておった。

二回目は腹が引っ掛かってしもうたが、前に倒れる様な感じで門を越すことができた

んじゃ。　わしと小次郎は後に続いて門をヒョイと飛び越えたわい。

門の内側へ入ると庭の草は、わしらの背丈よりも伸びておった。ペルシャを先頭に、わしらはペルシャのお気に入りじゃった窓の下まで進んで行ったんじゃ。ペルシャは暫く座り込んで窓の方を見上げておった。

小次郎は変な虫を見つけてキョロキョロ目で追っておったわい。

わしが小次郎のことを見とったら、突然、前方でペルシャが倒れたんじゃ。

わしと小次郎はたった十歩の距離を、全力で走って駆け付けたわい。

ペルシャは既に意識朦朧になっておって、ただ有り難う、あたいも次郎と小次郎のことを忘れんから、あんたらもあたいのこと忘れんでくれやと言って死んでしもうたんじゃ。絶対に忘れんぞ言うのが精一杯で、またろくなことも言わずに別れることになってしもうたんじゃ……。



わしらはペルシャの遺体はそのまま元御嬢様邸に置いて行くことにして、わしと小次郎それぞれペルシャに別れを言い、その場を後にした。

思えばペルシャは飼い猫じゃから、わしみみたいに小次郎の様な兄弟はおらんかった。何時も家の中で一匹じゃった。

ペルシャは御嬢様のことを嫌いじゃ無いと言うておったから、御嬢様もきっと与っさんと同じ様にペルシャに親切にしてくれていたはずじゃよ。じゃからその御嬢様となぜ別れることになってしもうたんか分からんが、別れた後はきっと、ペルシャはさぞ寂しかったことじゃろうなあ。

わしと小次郎で決めてその後一週間、ペルシャのことを悼んで喪に服することにしたんじゃ。

ペルシャは本当に幸せだったんじゃろうか、そんなことをわしは一週間、ずっと考えておった。

「三毛猫次郎の短い一日（4巻）」

おしまい